

# EDUCATION

## 第8回 Inter-Medical School Physiology Quiz に参加して

久留米大学医学部生理学講座統合自律機能部門 石松 秀

去る9月24, 25日の2日間、クアラルンプールにおいてマラヤ大学生理学講座主催により第8回 Inter-Medical School Physiology Quiz (IMSPQ) が開催された。IMSPQは、2003年に始まり年々規模が大きくなり、今大会はカンボジア、エジプト、サウジアラビア、ルーマニアから新たな参加もあり、14カ国41チーム約170名の医学生が参加する過去最大の大会となった。日本からは、ホストの Prof. Cheng Hwee Ming の熱心なお誘いと日本生理学会教育委員会からの呼び掛けもあり、昨年に引き続き久留米大学から4年生3名が参加した。大会の目的は、医学生が生理学を勉強するきっかけとし、更に勉強することの enthusiasm と喜びを伝え、世界各国の医学生と交流を図ることにある。引率教員にとっては、各国の研究者と交流を図り、研究や教育についての情報交換の場となる。各国とも日本と同様に生理学の教育・研究者確保に苦労している様だった。

大会第1日目は、計100問からなる正誤問題の筆記テストが行われた。この成績により Oral Quiz 本戦のグループ分けがなされる。夕食の後に Quiz Concert が行われ、各チームが歌や踊りを披露した。久留米大学生も浴衣とチョンマゲ姿でマツケンサンバを踊り大好評だった。大会2日目の Oral Quiz 本戦には、筆記試験上位の29チームと、敗者復活戦による3チームが進んだ。一回戦は4チーム間で争われる。先ずあるチームの回答者に問題が出題され、正答ならば得点となる。もし誤答したり10秒以内に答えられなければ、他の3チームの早押しで回答する。各問題は、生理学に根ざしながらも臨床的な要素も加味され難易度は高く、また独特なマレー英語が更に難しくしてい



る。久留米大の成績だが、筆記試験は41チーム中22位と予選突破は果たしたが、本戦で敗退した。しかし熱気と興奮に包まれ、とても楽しい Quiz Weekend を私も学生も楽しんだ。最後にこの大会に参加した3名の学生の感想を紹介する。

生理学クイズに参加して2つの大きなものを得ることができました。1つは、生理学を全体的に復習することができたことです。部活の大会や試験があり大変でしたが、計画的に生理学の勉強を進めることができ、今後のCBTにも繋がる有意義な学習ができました。2つ目は、海外の医学生と交流が持てたことです。自分なりの英語でコミュニケーションがとれたことが嬉しかったです。そして何よりも彼らの学力の高さと、興味をもったことに対する積極的な姿勢がとても眩しく感じ、自分も彼らに負けまいよう努力しなければならぬと思いました。(中島祥晴)

生理学の世界大会を終えて感じとったことは、



アジアの医学生のレベルの高さである。その原因はやはり勉強に対する態度と勤勉さの差であると思った。その勤勉さは以前の日本を彷彿させるものであり、学生として当たり前のことであるが今

の我々日本の学生に欠けているものでもある。昔の学生にできて今できないことはない。これから自分なりには意識改革を進め、英語のハンディキャップを乗り越え世界に通用する医師になりたいと思った。(堀川剛)

話を頂いた時には全て英語での勉強ということで戸惑いもありましたが、一生懸命に勉強に打ち込み大変有意義な時間を過ごすことができたと感じています。大会では何もかもが新しい体験の連続であり、世界各国の学生と交流出来たことはかけがえのない思い出となりました。またこの交流を通じて一段と広い視野を持って医学の勉強に励んでいこうと思えるようになりました。このようなチャンスに恵まれたことを大変幸せに感じます。(姉川英志)